

宮崎大 米村敦子

目的：高齢者が住み慣れた環境の中で、無理なく自立して、地域の風土や文化に根ざして生活していくための条件整備として、地域福祉施設やサービスと連携した生活保障としての住環境整備と、高齢者が造りあげてきた住生活文化との調和という課題が考えられる。本研究は、このような視点から、高齢化に対応した住環境整備と伝統的な住生活文化の保全問題について、急速な過疎化と高齢化が進む宮崎県下の過疎山村を対象に、アンケート調査・住まい方調査・住宅実測調査の三手法の調査を実施して検討した事例研究である。

方法：調査対象地を、県下で最も過疎化と高齢化が進む過疎山村、児湯郡西米良村（人口1,543人、高齢化率31.9%）と、西諸県郡須木村（人口2,786人、高齢化率24.6%）（1995年国勢調査）に選定して、65歳以上の高齢者と20歳以上の成人層を対象に、住環境と住生活文化に関するアンケート調査を実施し（1996年、2～3月）、その結果を基に抽出した住戸を対象に、住まい方調査および住宅実測調査を実施した（1996年11月～1997年2月）。

結果：両村とも地域への愛着が強い中で、住環境整備の課題としては、交通・道路や医療施設等の地域環境問題や、建物の老朽化や収納や水まわり設備等の住宅問題が明らかとなり、また、高齢者福祉施設への期待感が高い実態が認められた。住生活文化の面では、両村各々に特徴的な民家（西米良村の米良型民家—主に県北西山間部に分布する併列型民家の系列一と、須木村の分棟型民家—主に県南西部の旧薩摩藩領に分布する—）が点在し、また、豊かな住生活の知識や技術を有しながら、その価値認識が薄く、貴重な伝統民家も住生活の文化も、過疎化と高齢化の中で、年々衰退と変容の現状にある実態が認められた。